

ICT舗装の見学会開催

小貫建設 関東道路 ファイニッシャーを活用

小貫建設(小貫重社長)と関東道路(武藤正浩社長)は16日、結城市芳賀崎地内でICT施工見学会を開催した。今回の工事内容はファイニッシャーによるICT施工となり、これは真土木部発注工事としても初めての試みになるという。見学会には真筑西土木事務所職員らが参加し、ICT舗装工についての見識を深めた。

見学会の対象となった工事は、筑西土木事務所発注の「筑西三和線、31号補地道第31-488-4号道路改良舗装工事」で、元請は小貫建設、下請は関東道路が担当する。以前から人手不足に対応するためにICT施工に着手し、昨年8月にはグレーダーとファイニッシャーの施工見学会を実施することとなった。見学会の開催に当たっては、3月にはグレーダーの施工見学会を開催し、今回はファイニッシャーの施工見学会を実施することとなった。



小貫社長



武藤社長

今回のICT施工の特徴は、工事に使用するICT建機を自前で用意したこと。関東道路では、



ファイニッシャーを使ったICT施工



参加した県職員は担当者から説明を受けた

では、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大の状況を踏まえ、規模や人員を大きく縮小し、感染拡大防止に配慮しての開催となった。見学会では実際にオペレーターがファイニッシャーを操作する様子や、トータルステーションを用いた舗装の厚さチェックなど、施工状況を見学した。見学会について武藤社

長は、「ICTファイニッシャーのオペレーターは入社4年目の社員が務めたことを紹介しながら、「通常、今回の工事規模を担当するには10年ぐらいの経験を積む必要がある。しかし、ICT建機を使用すれば、若手であっても遜色のない仕上がりが可能になる。これは若手育成にかかる時間がらみると、大きな短縮であり、生産性向上につながる」とICT施工の効果に期待を寄せた。

また、関東道路では、公共工事以外に民間工事でもICT舗装を採用していることを説明したうえで、「これまでの工事により、ICT舗装のメ

リットやデメリットが分かってきた。引き続きノウハウを構築するともに、さらなる技術革新に向けて取り組むたい」と意気込みを語った。小貫社長は、建設業の課題である人手不足の要因のひとつとして、技術の習得に時間がかかることを指摘し、「ICT施工によって、熟練者でなくとも建設機械がある程度扱うことが可能になった。これにより、習得期間の短縮はもとより、自分に関わる仕事が増えることで、モチベーションの上昇にもつながる」とメリットを説明し、今後

も引き続きICT施工を実施していく考えを示した。また、小貫社長は、ICT施工による生産性向上とあわせて、週休2日制などの働き方改革についても推進し、若手入職者増加に取り組みしていく考えを述べた。